

現代俳句と古典

飯塚ひろし

はじめに

俳諧のもとには「座の文芸」で、その中核をなす「連句」は、人々の共同作業により作られたものであった。詩情は座の雰囲気により連想を生み、その輪を広げた。俳句の持つ近代と反近代は反発しつつ、様々な潮流を生むに至っている。

そして、「俳句とは何か」と問い直されながら優れた詩的表現を生み、今日の盛況をみるに至ったのである。

松尾芭蕉

いま、なぜ芭蕉なのか。通俗、卑俗に陥った俳諧は、芭蕉の出現により一挙に精神的なポテンシャルを高め、自在な表現形式を獲得する事になった。芭蕉の精神構造には、大自然を超越したものが内在していたに違いない。そして、真摯な人間探求者と機知機略に富んだ俳諧師との二面性を兼ね具えていたに違いない。芭蕉は「わび」「さび」を追求した結果、「軽み」の俳境に達した。

一つぬいで後に負ひぬ衣がへ

芭蕉

江戸期には、更衣の時期を現代よりも厳格に守っていた。四月朔日の「衣がへ」の時にぶつかった旅中の芭蕉は、愚直にもそれに従った。極めて無

造作に、一枚脱いで背中に負うたと言う。可笑しみとウイットがこの句の詩因である。この句の「軽み」は、一枚を脱いで荷物に包んで背負った事を、旅の芭蕉の更衣だと澄ましている点に可笑しみがある。表現の「軽さ」にも拘らず、奥行きが深い。可笑しさの裏には哀愁が漂う。

一家（ひとつや）に遊女もねたり萩と月 芭蕉

奥の細道の紀行文の中で最も艶っぽい作品で、襖を隔てた部屋に若い遊女が寝たと言う。謹厳実直な芭蕉翁はさぞかし寝苦しかったに違いない。これは物語的興味を盛るために加えられた虚構との見方もある。田舎の遊行婦女に行き逢った事実があったらしいから、虚構にしても、想像の根拠になったであろう。可笑しさと仄かな哀愁の漂う作品で、遊女が萩で芭蕉が月、またその逆を考えると笑いが倍増する。

秋深き隣は何をする人ぞ 芭蕉

芭蕉にしては、余りにも単純な、淡々とした表出であるだけに、人は様々な感銘をこの句から受ける。童心に返り初心に根ざした述懐である。隣の人の挙動に耳を澄ましていると、隣でも同様に此方の挙動を探っている。隣の人は殺人鬼かも知れぬ。これはブラック・ユーモアに似た諧謔があり愉快である。

滑稽な俳句は「可笑しみ」の中からも「悲しみ」が滲み出るのがベストであろう。

(次号に続く)